

中学校を支援 若者奮起

地元出身の京大院生ら ウェブカメラなど寄付

故郷に恩返しを。丹波市出身の学生や社会人の若者有志が、「丹波市オンラインプロジェクト」と銘打って寄付金を募り、購入したウェブカメラなどを市内の中学校に寄贈し

た。新型コロナウイルスの流行で、本来の学校生活ができない子どもたちの教育を支えようと、23歳世代の12人が奮起した。

(藤森恵一郎)

丹波市

発起人は、青垣中 どの政策動向も調べ、課題を呼び掛け、63人から16万8468円を集めた。18日、学校出身で、京都大を洗い出した。そして、教育現場がまさに必要としている機材を購入することに決定。5月7日、友人や知人らにスマートフォン決済サービス「ワイフアイ」のルーター1台を

「丹波市で受けた教育があるから、今の自分がある。故郷のため、少しでも力になれないか」。中学時代からの友人に声を掛け、当時の生徒会や部活動のつながりも生かして、他校出身の同世代へとプロジェクトの輪を広げた。手を挙げた12人は、関東、関西など居住地はばらばら。緊急事態宣言下だったため、テレビ会議アプリ「Zoom(ズーム)」を使って活動方針を話し合った。「市や学校に負担を掛けるは本末転倒だ」と、需要をしっかりと把握することに。手分けして市内の小中学校に聞き取りをしたほか、市や県、文部科学省な



テレビ会議アプリ「Zoom(ズーム)」で話し合うメンバー(藪下文也さん提供)

テレビ会議重ね資金集め

大槻芳裕校長は「若い方たちが行動を起こし、機材を届けてくれたことは、本当にありがたい」と深く感謝する。中にはウェブカメラが1台しかなかったが、台数が増えたことで、Zoomを使って生徒の健康観察をする会議を、同時に複数のクラスで行えるようになった。カメラは市内の他の中学校でも役立てられているという。

活動は5月初めから2カ月間を予定していたが、その後、緊急事態宣言が解除され、6月1日からの学校再開が決まった。藪下文也さんは今後について「丹波市の教育状況などを見ながら、自分たちにできることは何か慎重に議論し、見極めていきたい」と話している。



「丹波市オンラインプロジェクト」が寄贈したタブレット端末、ウェブカメラ、ルーター。柏原中学校